

牧口常三郎と河合榮治郎

松 井 慎一郎

はじめに

牧口常三郎と河合榮治郎の二人の思想家を取り上げて、その関係を詳細に考察した研究はこれまでなかったといつてよい。地理学および教育学を専門とし、小学校校長として児童教育に従事、晩年は日蓮仏教に辿り着き、宗教運動を進めた牧口に対し、社会思想史・社会政策を専門とし、東京帝国大学経済学部教授として、研究・評論活動において華々しい活躍をした河合。20歳の年齢の開きがあり⁽¹⁾、活動分野も異なる両者を同じ土俵で論じることに違和感があったのも無理はない。また、従来、それぞれの思想的な流れを汲む者たちとの間で多少の思想的あるいは政治的対立が存在していたこと、両者の全体像を明確にした客観的実証的な研究がほとんどなかったこと等も影響しているだろう。

しかし、近年の両者に関する本格的な研究の進展は、その間に思想的な関係が存在していたことを明らかにさせてくれる。こうした点に関して、斎藤正二の近著『牧口常三郎の思想』のなかの以下の一文は、大変参考となる。

『社会科学大事典』の出された一九三〇年五月といえ、牧口常三郎にとっては『創価教育学体系・第一巻一第一編教育学組織論／第二編教育目的論』刊行の恰度半年以前であり、『創価教育学体系・第二巻一第三編価値論』刊行の十ヶ月以前に当たる。いっぽう、河合榮治郎『社会政策原理』は牧口両著作から略々七ヶ月また三ヶ月後に出版されているが、河合と牧口の間には相互に殊更なる影響関係が在ったと推論することは出来ない。しからば、牧口常三郎が、終始一貫して、河合の学問に関心や興味を示さなかったかと問えば、それも間違っている。同軌の《理想主義的=自由主義思想家》として、《平和的=反国粹的思想家》として、なにより《価値理論探求者》として、牧口は尠なからざる親しみを感じていたはずである。だが、われわれは、なにがなんでも牧口常三郎と河合榮治郎とを結び付けようと掛かる必要は無い。大正デモクラシー期から昭和一桁年代に至る期間、境遇の懸け離れた二人の秀れた社会科学思想家が一箇の最醇良の《同時代精神》を分かち合った偶然=僥倖をば、けっして苟且事と受け取らぬよう、さらには、同じ一九四四年という年に凶暴なる国家権力および国粹主義詭弁家の奸策によって惜矣兩人ながら死期を早める運命を迎えた奇禍=災禍に思いを致すよう、われわれ自身の精神を研ぎ澄ますべく努めれば、それで充分である⁽²⁾。

⁽¹⁾ 牧口は1871年、河合は1891年に生まれている。

⁽²⁾ 斎藤正二『牧口常三郎の思想』第三文明社、2010年、375～376頁。

本稿は、上の斎藤の指摘を参考にしつつ、河合研究の立場から、牧口と河合の思想的関係を探ろうとするものである。

1. 『創価教育学体系』と『社会政策原理』

1930年11月に刊行された牧口の『創価教育学体系』第1巻と翌31年7月に刊行された河合の『社会政策原理』は、ともに両者の代表的著作であるが、刊行時期が近いという以外に共通点はなさそうに思える。周知のように、『創価教育学体系』は、一小学校校長であった牧口が現場での経験を生かしながら既存の教育学を批判し、「人生の目的たる価値を創造し得る人材を養成する方法の知識体系」⁽³⁾である「創価教育学」という全く新たな教育学理論を主張したものである。しかし、新渡戸稲造が「是は独り従来の実際社会と没交渉であつた行詰れる教育の改造の第一歩であるばかりでなく、実に教育改造を契機とせる行詰れる現代社会の革新に甚大なる寄与をなすものである事を信じて疑はないものである」と評価した⁽⁴⁾ように、単に教育上の改革を目指しただけでなく、当時の行き詰まった社会情勢をも変革しようとする意図を含んでいた。

折しも、『創価教育学体系』第1巻が刊行された1930年、浜口雄幸民政党内閣が1月に断行した金輸出解禁により、前年ニューヨーク株式市場の大暴落に端を発した世界恐慌の煽りをまともに受け、日本は未曾有の経済不況に見舞われた（昭和恐慌）。農村では農産物価格の暴落が相次ぎ、娘の身売りや欠食児童が続出し、都市部でも失業者が増大し、大学生の就職難は一層深刻なものとなった。こうした経済不況に対応する形で、階級闘争理論が人口に膾炙し、労働争議や小作争議が全国各地で激化、日本共産党も急進化していった。また、不況への有効な打開策を見出せないまま、軍部の反対を押し切りロンドン海軍軍縮条約を調印した浜口内閣に対して、軍部や右翼勢力が大きく反撥、11月には右翼青年によって浜口首相が狙撃されるという事件まで発生した。そして、こうした生存競争の激化に付いて行けないか、もしくは脱落した者は、カフェー通いやスポーツ観戦に夢中になるなど「エロ・グロ・ナンセンス」と呼ばれる頹廢的な文化に身を浸るという状況であった

こうした騒然たる社会情勢のなかで、牧口は、「真の幸福は、社会の一員として公衆と苦楽を共するのでなければ得る能ざるものであり、真の幸福の概念の中には、どうしても円満なる社会生活といふことが欠くべからざる要素をなすことが容易に承認されよう」⁽⁵⁾と、他者との対立ではなく共存を目指そうとしたのである。

深刻な経済不況下での生存競争を勝ち抜くために、多くの者が金銭的向上をはかるなかにあつて、牧口は「幸福」と「財産」を強く切り離すことを主張する。

真の幸福なる意義を闡明するには、財産との関係を詮議する事が緊要である。通俗にこれほど混同されて居て有害なるものはない。『遺産は相続することが出来るが、幸福は相続する事は出来ぬ』といふア

(3) 『牧口常三郎全集』第5巻、第三文明社、1982年、13頁。

(4) 新渡戸稲造「我が国将来の教育と創価教育学」『牧口常三郎全集』第8巻、1984年、114頁。

(5) 『牧口常三郎全集』第5巻、131頁。

ルフレット・ノベル氏の格言は、幸福と財産との不一致を喝破して余蘊ないもので、余の一生中にこれ程力強き適切なる教訓を、言語の上で受けた事がないことを断言して憚らないのである。貧富隔絶、階級争闘の世界的風潮に立ち到った現今の如きは有史以来曾てないことで、世の識者といふ識者は、此の滔々たる世界の大勢を如何ともすることが出来ずに、吾も人も周章狼狽徒らに拱手傍観して世の成り行きに一任してゐるに過ぎない。余は此の時に当つて、資本階級にも、労働階級にも、此のノベル氏の教訓程適切な教訓はないと信ずる。其れと共に一度想ひを此処に致せば、憎み合ふ闘争の地獄世界、殺し合ふ悲惨な修羅の世界を現出する前に、必ずより良き社会改良の手法、手段が発見せられ、人生の眞の幸福に万人が親しみ得ることを確信するものである⁽⁶⁾。

牧口によれば、階級闘争の激しさをもたらし思想を陰悪にしているものこそ、因襲的に「人類の痼疾」となっている「財産と幸福との一致といふ妄想」であり、その批判の鋒先は、その妄想を促進させている「無制限なる私有財産制度」に向かう⁽⁷⁾。「財産の無制限なる私有が今の社会の最大なる弱点であり、少くとも、その重大なる一である」と指摘し、その変革について、「これが促進に就ては外部からは政策上にその改革をなす事であり、内部からは或る必要程度以上の私有財産は結局無価値であるといふ事を理解させるのにある」⁽⁸⁾と主張する。

そして、牧口が理想とするのは、宗教家や「眞正の教育家」のような「財産はないが、無限の欣悦に浸り、無限の英気に培はれ、依つて以て安心立命し、虚心純潔にして小児の如き天真無限の幸福を感じずる」⁽⁹⁾という生活であり、「公生活即ち社会生活を意識せしめ、之に順応して自他共に、個人と全体との、共存共栄を為し得る人格に引き上げんとするのが教育である」⁽¹⁰⁾と述べるのである。

未曾有の経済不況とそれに伴う思想対立で騒然とするこの時期、『創価教育学体系』と同様、他者との対立・競争より調和・共存を主張したのが、河合榮治郎『社会政策原理』であつた。『社会政策原理』は、東京帝国大学経済学部において「社会政策」の講義を担当していた河合が、時代の課題に応えるべく、資本主義経済の分析を行うとともに、自己の理想主義哲学を土台に、資本主義を変革して社会主義体制を構築すべきことを主張したもので、河合の理想主義的社会主義という独自の思想体系をはじめて明確に打ち出した著作であつた⁽¹¹⁾。

ここで河合は、「社会政策の目的は、社会に属するあらゆる成員が人格の成長を為しうる社会組織を構成することである」⁽¹²⁾と、これまで経済政策や労働政策を中心に展開されてきた社会政策という学問を、「人格の成長」という哲学的課題と結びつける。そして、「社会のあらゆる成員の人格の成長」という課題を果たす上で克服・打破すべきものとして、資本主義制度をあげる。

河合は資本主義の弊害を四点指摘する。第一に、「プロレタリア」(労働者)は「ブルジョア」(資本家)より剰余価値を搾取されるため、「生産過程に於て就業時間の過重を強いられ、その生

⁽⁶⁾ 『牧口常三郎全集』第5巻、131～132頁。

⁽⁷⁾ 同上、134頁。

⁽⁸⁾ 同上、138頁。

⁽⁹⁾ 同上、133頁。

⁽¹⁰⁾ 同上、143頁。

⁽¹¹⁾ 拙著『評伝河合榮治郎』玉川大学出版部、2004年、119頁。

⁽¹²⁾ 『河合榮治郎全集』第3巻、社会思想社、1968年、20頁。

活は一日の疲労を回復する為に辛うじて役立つのみで他事を顧みる暇がな」く、しかも、消費生活においては「賃銀の低下がある上に、更に消費者として搾取され、高価なる生活資料を買うべく余儀なくされる」状態にあり、「人格の成長」のために必要な道徳的経済的条件を欠く。第二に、「ブルジョア」は「何等労働に服することなしに、唯余剰価値を搾取して生活する」。しかも、「不労の所得を奢侈逸楽に消費しつつある」ため、「人格の成長」を阻害される。第三に、「ブルジョア」の搾取・支配に対して「プロレタリア」が憎悪と反感を抱く結果、階級闘争が引き起こされ、「反抗憎悪はプロレタリア階級に浸潤し、ブルジョアも亦直観的に自己の地位に疚しさを感じるが故に、不安と恐怖とに脅威され」、「あらゆる成員の人格の円満なる成長に反し、偏奇したる人格を作らざれば止まない」。第四に、「資本主義のイデオロギーたる物質主義」は、「物件たる富を最大量に所有すること」を目的とするため、「人格の成長」という目的と「根本的に衝突する」⁽¹³⁾。そして、河合は、資本主義に代わるべき新しい社会体制として、(一)「生産手段の私有の廃止と生産の統制」、(二)「あらゆる成員は労働の義務を負う。但し少年老癯者は此の限りではない。又労働とは必ずしも筋肉労働のみを意味せず頭脳労働をも包含する」、(三)「あらゆる成員に生活の最低標準を保証する」という3つの条件を含む「社会主義」を主張する⁽¹⁴⁾。

そして、その社会主義社会の実現に関しては、「総選挙に於て社会主義社会の必要を民衆に説得し、民衆を社会主義に改宗せしめることにより、社会主義政党に投票の大多数を獲得し、之を以て衆議院に於ける絶対多数党を形成し、社会主義の法案を通過せしめることにより、社会主義を実現せん」⁽¹⁵⁾と、穏健な議会主義を主張する。しかも、その議会主義が正当性を主張する条件として、第一に「政府の中心が民衆の選挙する議員より構成される衆議院に存すること」、第二に「衆議院の議員を選挙する資格が、男女を問はず、苟も判断能力を有する年齢以上の一切の民衆に与えられること」、第三に「言論の自由が認められること」を指摘するのである⁽¹⁶⁾。

以上のように、『創価教育学体系』と『社会政策原理』の内容を比較すると、興味深いことに、双方ともマルクス主義同様に私有財産制度の変革を主張していることがわかる。しかし、その変革方法は、マルクス主義が主張する暴力革命ではなく、国民各人がその弊害を正しく認識した上で行うという穏健的教育的な方法を主張しているのである。

かつて牧口は、日露戦争前後、山根吾一をはじめとする平民社系の社会主義者たちと交流していた時期があった⁽¹⁷⁾。しかし、現社会を破壊することに躍起となって破壊後の建設案を持ち合わせない社会主義者たちとの間に意見の相違を見出して袂を分かち、以後、「破壊的運動のみによらずとも、建設的穏健手段により、資産階級の理解に訴へて、改革可能の時期が来ぬことはなからう。然らば之こそ教育者として相応しき途であらう」と考え、「国体問題に触れない範囲に於け

⁽¹³⁾ 『河合榮治郎全集』第3巻、226-229頁。

⁽¹⁴⁾ 同上、237頁。

⁽¹⁵⁾ 同上、246頁。

⁽¹⁶⁾ 同上、252頁。

⁽¹⁷⁾ 牧口と山根の関係については、岡林伸夫『ある明治社会主義者の肖像—山根吾一覚書』（不二出版、2000年）参照。

る社会改良運動」を目指したのである⁽¹⁸⁾。それに対して、河合は、大正末期におけるイギリス留学を通じて、フェビアン協会や労働党をはじめとするイギリス社会主義から多大な影響を受け、理想主義哲学に基づく社会主義を主張し、昭和に入って台頭してきたマルクス主義者たちとの間で激しい論争を繰り広げたのである。

牧口と河合が、既成の社会主義者たちと共闘することができなかつたのは、その究極的な目的が、社会の制度的な変革でなく、人間の意識変革にあったからである。「人間には物質を創造する力はない。吾々が創造し得るものは価値のみである。所謂価値ある人格とは価値創造力の豊かなるものを意味する。この人格の価値を高めんとするのが教育の目的で、此の目的を達成する手段を闡明せんとするのが創価教育学の期する所である」⁽¹⁹⁾ というように、牧口が目指したのは人格の価値の向上であり、河合がその著作活動や教育活動を通じて一貫して説き続けたのも、人格こそが最高価値であり、その成長こそが人生の目的であるというものであった。ただし、河合の人格概念は、「人格とは真、善、美を調和し統一した主体である」⁽²⁰⁾ というように、新カント派の「真・善・美」の価値体系に基づいたものであったのに対して、牧口は、「真理は創造する事は出来ない。たゞ自然にあるがまゝを吾々が見出すに留まつたものである」⁽²¹⁾ として、真理を価値体系から外し、新たに経済的価値である「利的価値」を加え、「利・善・美」の価値体系を提唱した。牧口と河合は、昭和恐慌という未曾有の不況に見舞われ物質的価値ばかりを追求しがちな風潮のなかで、理想的な価値体系を示し、その追求に人生の幸福ないしは最大目的があることを主張したのである。国民の多くが物質的な繁栄を求めて、領土拡張を進める軍部に大きな期待を寄せ、結果的に史上空前のカタストロフィーを招いたことを考えると、この二人の思想家の歴史的意義は極めて大きい。

2. 『人生地理学』と「火山論」

同時期にほぼ同じ問題意識を有していた牧口と河合であるが、一介の小学校校長にすぎない牧口と最高学府の教授である河合が邂逅することは現実的になかった。1931年2月18日、牧口は東京帝国大学文学部教授の吉田熊次に招かれ、同大学内の山上御殿において、「創価教育学における五問題」と題する講演を行った⁽²²⁾ が、学部が異なり専門の違う河合がここに列席することはなかった。しかし、斎藤正二が指摘するように、論壇で華々しい活躍をする河合に対して、牧口が「渺なからざる親しみ」を感じていたことはあつただろう。では、河合の方はどうであつたのか。社会思想史研究者あるいは社会評論家として大成してからはともかくも、その若き日の思想形成期において、河合は牧口の著書を愛読していた時期があつた。

1907年12月、東京府立第三中学校5年生であつた河合は、同校の学友会が発行する『学友会雜

⁽¹⁸⁾ 『創価教育学体系』第2巻、『牧口常三郎全集』第6巻、1983年、23頁。

⁽¹⁹⁾ 『創価教育学体系』第1巻、『牧口常三郎全集』第5巻、13頁。

⁽²⁰⁾ 『学生に与う』『河合榮治郎全集』第14巻、1967年、53頁。

⁽²¹⁾ 『創価教育学体系』第2巻、『牧口常三郎全集』第5巻、220頁。

⁽²²⁾ 海後宗臣「四十年前の牧口常三郎先生」、美坂房洋編『牧口常三郎』聖教新聞社、1972年、438-439頁。

誌』に「火山論」と題する論文を発表した。この論文は、冒頭で「題して火山論と云ふも実は箱根火山を地文学より研究したる結果のみ」⁽²³⁾と断っているものの、箱根山だけでなく火山一般を対象に、しかも地文学（自然地理学）的な観点だけでなく、美学的および人生論的な観点から考察するものであった。末尾の「参考書目」には、志賀重昂『日本風景論』、小島烏水『日本山水論』、山崎直方・佐藤伝蔵編『大日本地誌』、高頭式編『日本山岳誌』、石川成章『地文学講義』などとともに、『人生地理学』の書名が記されている⁽²⁴⁾。

32歳の若き牧口が1903年に出版した『人生地理学』は、地理学＝自然地理学という考えが大勢を占めるなかにあつて、「地理学は地球の表面に一定の規律をなして分布する自然現象と人類生活現象（人生現象）との関係の系統的智識なり」⁽²⁵⁾との考えに立ち、地形、気候、風土などの自然的環境と、経済、政治、軍事、宗教、学問、芸術、教育などの「人間の生活」との関係の世界規模で総合的に考察した大著であった。地理学界に止まらず広い分野で高い評価を得、多くの新聞・雑誌誌上で紹介・書評され⁽²⁶⁾、長い期間にわたり版を重ねたロングセラー書であった⁽²⁷⁾。

河合が「火山論」を執筆する上での参考文献として『人生地理学』に辿り着いたのは、その当時における高い評価からすれば当然のことであつただろう。また、河合を指導していた府立三中の地理・鉱物担当教諭の正木助次郎から紹介された可能性も否定できない。後年、正木は、新渡戸稲造を実質的な座長に、柳田国男を幹事として、地理、風俗、農政、その他郷土に関する様々な話題を討議した郷土会に、牧口や小田内通敏らとともに参加している⁽²⁸⁾。

「火山論」における火山の美学的観点は志賀重昂『日本風景論』、地質学的観点は石川成章『地文学講義』などを参考にしながら論じているが、火山の精神的側面や人間生活との関係などは、『人生地理学』に大きく依拠している。「火山論」の「(一五) 火山と人生」という節は、『人生地理学』の「第九章 山嶽及谿谷」「第六節 火山と人生」から大きな影響を受けてまとめたものである。ここで、河合は、火山活動の結果として生じた温泉を取り上げて、それが人間の身体および精神の上に及ぼす影響を以下のように指摘する。

温泉は火山活動の余勢にして之を緩性の火山と云ふも不可なからん随て温泉の配置は自ら火山の分布に伴ふもの多し、而して畜に人身療養となるのみならず多くは幽邃跌宕なる溪間に在るが故に又精神上にも静養に適す⁽²⁹⁾。

上の河合の文章は、『人生地理学』中の以下の文章の要約であることは確実である。

⁽²³⁾ 河合栄治郎「火山論」『学友会雑誌』第11号、1907年12月、86頁。

⁽²⁴⁾ 同上、110頁。

⁽²⁵⁾ 『牧口常三郎全集』第2巻、1996年、427頁。

⁽²⁶⁾ 現在までのところ判明している41の書評は、塩原将行「牧口常三郎著『人生地理学』41の書評」（『創価教育研究』第2号、2003年3月）で全文翻刻されている。それらの書評を分析したものに、沖慶子「牧口常三郎著『人生地理学』の同時代評」（『地理科学』vol.58 no.2 2003）。

⁽²⁷⁾ 少なくとも第11版（1914年）まで版を重ねたという。前掲沖論文、2頁。

⁽²⁸⁾ 郷土会については、鶴見太郎『ある邂逅—柳田国男と牧口常三郎』（潮出版社、2002年）、参照。

⁽²⁹⁾ 前掲「火山論」106頁。

火山は温泉を副生するによりて、人類の病氣療養に大なる効果を顕はす。温泉の起因は全く火山と起因を等うし、寧ろ緩性の火山と云ふべきものなれば、自ら火山の配置と共に分布せらるゝこと多し。従つて其位置自ら火山岩の幽邃跌宕なる谿間にあるが故に、身軀上に効力あるが上、精神上にも頗る静養に適す⁽³⁰⁾。

また、河合は、「火山の頂には血の池地獄、油の地獄、鳥の池^(マツ)地獄、賽の河原等仏典中に見ゆる名称あるより見れば火山と宗教との間に又一の関係あるならんか⁽³¹⁾と火山と宗教との関係を指摘するが、これも、『人生地理学』に「火山の頂上に血の池地獄、油の地獄、鳥の地獄、賽の河原等、多くの仏教の經典中の名称あるを見れば火山と宗教との間に一種の関係あるは疑ふべからざるものゝ如し⁽³²⁾」というほぼ同一の文章が存在する。

それから、「火山論」は、「(八) 芦の湖」という一節を設けて、箱根山の火口湖である芦ノ湖と日本人の精神性との関係を以下のようにユニークな視点で論じる。

翻りて本湖と国民性との関係を見よ。上は貴紳王侯の庭園より下は田夫野郎が一日の労働を慰却せんがために一杯の粗茶を喫しつつ眺むる椽先の函庭に至るまで其材料は実に譎奇変怪なる火山岩に型れる築山と其倒影を映ずる湖ならざるなし而して彼築山師が其意匠の根源は実に芦の湯^(マツ)に来ると云ふも不可なきなり⁽³³⁾。

しかし、これも、『人生地理学』中の「第十二章 湖沼」「第四節 湖沼と人生の精神的方面」の以下の文章からの剽窃であることは疑いようがない。

湖沼と人心との交渉中最も直接にして且つ最も顕著なるものは山と結合して絶景を表はして人心を感動せしむるにあるが如し。日本国民の殆ど全部が一杯の粗茶を喫しつつ以て一日の労苦を慰却する函庭の景色は最も卑近に而かも最も顕著に此関係を表はすものと云ふべし。規模に大小こそあれ。上は王侯貴紳の庭園より下は田夫野人の椽先に至るまで、日本人の何人にも最も嗜好に適したるものとして造られたものは譎奇変怪なる火山岩に型とれる築山の下に其影を倒映する湖面を表はさざるなし。山嶽と湖水、是れ日本人の心目に最も適したる絶景の要素。(中略) 試みに所謂築山師なる者の意匠の根原の材料を分析せんか恐らくは琵琶湖、諏訪湖、蘆の湖、中禅寺湖等の絶勝と此等の材料によりて組立てたるものに過ぎざるべし⁽³⁴⁾。

このように、「火山論」は、火山と人間生活との関係という論点はもとより細かい文章上の表現にいたるまで、『人生地理学』に大きく依拠していたのである。この時期、河合の関心が火山に向かったのは、『自然と人生』などの徳富蘆花の著書や親友の中村孝二郎らの影響により自然現象への観察に目を開かれた⁽³⁵⁾ ことに加えて、火山の威容に理想的な人間のあり方を見出したからで

⁽³⁰⁾ 『牧口常三郎全集』第1巻、1983年、120-121頁。

⁽³¹⁾ 前掲「火山論」107頁。

⁽³²⁾ 『牧口常三郎全集』第1巻、123頁。

⁽³³⁾ 前掲「火山論」96頁。

⁽³⁴⁾ 『牧口常三郎全集』第1巻、215-206頁。

⁽³⁵⁾ 拙著『河合栄治郎—戦闘的自由主義者の真実』中公新書、2009年、39-42頁。

あると考えられる。河合は、「火山論」の冒頭で、火山を擬人化する以下のような文章を記している。

知るべし名山とは火山の異称なるを、而も火山の取るべきは其外形にのみに存せざるなり火山や水蝕風化の両作用に堪へ忍びてよく其奇骨を維持するも永き水蝕に遭ひて遂に抵抗しうべからざるに至れば潔く此れに従ひ磊々落落些の未練を止めず此の特種の性質は実に我日本武士に酷似たるものあり、此に至れば火山が日本人に嗜好せらるべき性質を具有して生れたるか抑又日本人が此れを讚美するの極此の如くに養成せられたるかに疑を挟まざるを得ざる程なり⁽³⁶⁾、

これは、『人生地理学』中の以下の文章に対応するものである。

火山の人間に於ける重要なる影響は、特殊の風景を顕出して、無形上に人心を感化するにあり。(中略)水蝕風化の両作用に堅忍して、能く其特殊の気骨を維持するにあり、而して火光焰々天日を焼きし当初の元気を失はず、且つ内部の非常なる火勢を表はすにあり。然れども永き水蝕に逢ふて愈と抵抗し得べからざるに当りては、潔よく之に従つて些の未練を留めず所謂磊々落落たるにあり。此特殊なる性質は奇妙にも、古来我国特有なる理想の大和武士に酷似するに似たり。此点より観れば、火山が最も日本国人の嗜好に適したるか、将た日本人が之を嗜好讚美するに適する如く養成せられたるものなるかを疑はざる能はざる程なり⁽³⁷⁾。

河合は「火山論」とほぼ同時期に「項羽論」という論文を執筆していた。ライバルの劉邦に敗れて30歳の若さで散った古代中国の英雄・項羽の人生を「蹉跎の歴史にして彼の一代は失敗の一代なり」⁽³⁸⁾と述べる一方、その悲劇的生涯に多大な同情を寄せ、「誂ひ向きの破壊的革命家」⁽³⁹⁾として徳富蘇峰ばりの文体で綴った大作であった。「彼生涯は血ある詩歌なり。熱血なる活動男児の典型として彼あるを我東洋は誇り得べし。浮世の功名利達に逡巡する輩よ汝は遠く去れ。名利を外に花の活動をなさんこそ男児の本領と云ふべけれ。嗚呼我れは劉邦となりて栄えんよりも項羽となりて死ななかな」⁽⁴⁰⁾という情熱的な文章で結んでいるように、天下を治めて栄華を極めた劉邦ではなく、名聞名利とは無縁に自己の信念の赴くまま激しく戦った項羽に多大な感情移入を行っている。かつてクラスメートからいじめを受け、孤独と挫折を経験していた河合⁽⁴¹⁾にとって、項羽のような戦闘的な勇ましい生涯こそ最も理想とするものであった。

名聞名利に左右されず絶えまなく戦闘的に挑戦していく人生は、幼少期から両親が離婚し養子に出されるなど不遇の運命と戦ってきた牧口にとっても理想とするものであった。『人生地理学』の「第二十四章 社会の分業生活地論」「第七節 社会の階級」において、牧口は、実業社会、政治社会、宗教社会、美術社会、学術社会、教育社会などの分業社会における「優勝級」「独立級」

⁽³⁶⁾ 前掲「火山論」87頁。

⁽³⁷⁾ 『牧口常三郎全集』第1巻、122頁。

⁽³⁸⁾ 河合栄治郎「項羽論」『学友会雑誌』第11号、8頁。

⁽³⁹⁾ 同上、25頁。

⁽⁴⁰⁾ 前掲「項羽論」30頁。

⁽⁴¹⁾ 拙著『河合栄治郎—戦闘的自由主義者の真実』24—28頁。

「劣等級」といった三つの階級を設定する。例えば、実業社会における「優勝級」「独立級」「劣等級」は、それぞれ「富裕資本家」「通常産者」「有識貧者及び労働者」、政治社会においては、それぞれ「高級の官吏政党的領袖」「中級の官吏及び之と同格者」「下級の官公吏及び之と同格者」となる。そして、すべての分業社会の「優勝級」の上位に、「全社会の優勝級」という階級を置く。これは「社会の全軀に着眼し貢献する富貴者及び其位置に安する鴻徳の貧者」⁽⁴²⁾であるとし、特に、後者の「鴻徳の貧者」に注目して以下のように説明する。

其赤貧者は貧に安んじ貧を厭はず、又た富貴を羨まず従つて貴富者たらんとも欲せず。何れにしても劇甚なる生存競争に逢ひ、失敗又た失敗、而かも之が為に毫も其元氣沮喪するなく其益々勇氣を増し、遂に最終の勝利を得て、然るものなり。天下後世の所謂英雄豪傑として崇拜せらる偉人は多く之に属せり⁽⁴³⁾。

これは、『創価教育学体系』第1巻のなかで論じている、「財産はないが、無限の欣悦に浸り、無限の英気に培はれ、依つて以て安心立命し、虚心純潔にして小児の如き天真無限の幸福を感じる」⁽⁴⁴⁾という人間像とほぼ同じものである。ここに、牧口が後年、数々の迫害にも屈せず国主諫暁や布教活動を貫いた日蓮に引き寄せられる一因があったと思われる。戦闘的な生涯に憧れていた河合にとって、牧口のこうした指摘は、我が意を得たものであっただろう。徳富蘇峰『吉田松陰』などと同様に『人生地理学』を読むことで、自らを奮い立たせたことが推測されるのである。

3. 自然環境の経済に及ぼした影響

「火山論」執筆後も、『人生地理学』が河合の愛読書であったことは、「日記」や「読書ノート」などの史料に『人生地理学』の書名が記載されていることからわかる。「火山論」以降、『人生地理学』の名が登場するのは、河合の1910年の日記帳⁽⁴⁵⁾の巻末に記載された「第一学期 購入書及読書目」においてである。当時、河合は第一高等学校3年生であり、「第一学期」ということは、1910年9月から12月にかけての期間に、再び『人生地理学』を繙いたことになる。そこには、『人生地理学』を含めて、60冊もの和洋書名が記載されているが、T・H・バツクル *History of Civilization in England*、J・R・シーリー *The Expansion of England*、A・T・マハン『海上権力史論』、坪井九馬三『史学研究法』、高山林次郎『世界文明史』など歴史書の多さが目に付く。同日記帳の「第一学期の回顧」には、「余が歴史の智識は実に急転直下の発展なせり。Seeley先生が英国膨張史は実に偉大なるインスピレーションを与へたりき。バツクルの文明史、マハンの海上権力史論、ギボン伝皆今までになき熱誠を以て読みたるもの。今学期に於ける此方面の智識は余が生涯中特筆大書すべき必用を見んか」と記されているように、当時の河合の最大の関心は歴史学にあった。『人生地理学』が再び繙かれたのも、そうした歴史学への関心に沿ったものと

⁽⁴²⁾ 『牧口常三郎全集』第2巻、234頁。

⁽⁴³⁾ 同上、236頁。

⁽⁴⁴⁾ 『牧口常三郎全集』第5巻、133頁。

⁽⁴⁵⁾ 河合浩子氏蔵、非公開。

考えられる。

というのは、翌1911年11月5日付の「読書ノート」に歴史学に関する記述のなかで「人生地理学」の書名が登場するからである。

新宅に於て那須兄よりか借りたる坪井先生の歴史地理学を読了す。余にハ予期したる程の興味なかりき、但し此書を読みて益速に人生地理学を読まばやとの念起りぬ。

(1) nomadic tribes が愈一定の地に於て生活し能はざるに至れば他に移動して良好の地を求めんとす、而して此の migration ハ物理及経済の法則に明なるが如く最小抵抗線に沿ふ、蓋し住みなれし所と成るべく変らぬ所又取り来りし産業と少しも変らざる所に赴かんとす。而して種々の障害に遭遇して成功せざりし時、内部の改良に訴ふ、此に於て始めて経済上の発展あり。

(2) エステュアリ^(マ) 性の河ハ河口の底が陥没して深くなるが故に、永に河口に沈殿物の溜らぬ河なり⁽⁴⁶⁾。

当時、河合は東京帝国大学法科大学政治学科1年次に在籍していた。上の文中の「那須兄」とは、後年、農業経済学者として名を馳せる那須皓である。那須は、当時、東京帝大農科大学を卒業したばかりの少壮学者であり、河合が最も親愛の情を抱いていた先輩であった⁽⁴⁷⁾。「坪井先生の歴史地理学」とは、坪井九馬三『歴史地理学』（早稲田大学出版部、1905年）のことである。那須が牧口も参加していた郷土会の一員として農村の研究を発表していたことや、牧口が『人生地理学』を出版する前に個人的な指導を受けていたのが坪井九馬三であることからすると、牧口と河合との間での不思議な繋がりを感ぜずにはいられない。また、新渡戸稲造が『人生地理学』を読んで感激して牧口に激励の手紙を送り、その後、郷土会で机を囲み、『創価教育学体系』の出版にさいして長文の序文を寄せるなど親密な関係を結び、河合が、一高時代在学中、校長の新渡戸から多大な感化を受け、人格の成長を最高価値とする理想主義・人格主義思想を自己の人生観として確立するにいたった⁽⁴⁸⁾ことを思い合わせるならば、河合は牧口の学問的空間の周辺に位置していたということもできよう。

では、なぜ、この時、河合は、坪井の『歴史地理学』を読んで「益速に人生地理学を読まばやとの念」に駆られたのだろうか。それは、『歴史地理学』のなかに『人生地理学』が指摘していた視点と同じものを見出したからである。それは、第一に、『歴史地理学』中の「第一編 総説」「人民の運動」において論述された、遊牧民族の転業に関するものであった。遊牧民族は従来住み慣れた土地とさほど変わらない所を求めて移動するが、種々の障害によって行き詰まった場合に、農業などの違う産業をおこすということをポーランド人やマジャール人を例にあげて述べていた⁽⁴⁹⁾。『人生地理学』では、「第二十一章 動物」「第十節 動物と文化」に、「家畜の数が最早人類の食料の全部を供給する能は^(マ)ざるに至らんか、已むことを得ずして農業に励精し、定住の

⁽⁴⁶⁾ 河合栄治郎「若き日の読書ノート（三）」『社会思想研究』第20巻第7号、1968年7月、45頁。

⁽⁴⁷⁾ 拙著『河合栄治郎—戦闘的自由主義者の真実』66—67頁。

⁽⁴⁸⁾ 河合と新渡戸の関係については、拙稿「近代日本における人格教育の系譜—新渡戸稲造と河合栄治郎—」（『新渡戸稲造の世界』第19号、2010年9月）参照。

⁽⁴⁹⁾ 坪井九馬三『歴史地理学』早稲田大学出版部、1905年、53—62頁。

生活に移るに至る。而かも転業の困難なるは文明人種に於ても尚ほ且つ至難の事なれば苟くも多少の依頼すべきあらば依然として遊牧の生活を脱する能は(ママ)ざるは宜なりといふべし⁽⁵⁰⁾との指摘がある。

第二は、三角江（エスチュアリー）が経済におよぼす影響ということである。『歴史地理学』では、「第三編 海岸」において、イギリスのテムズ川を例に、堆積物が沈積しにくく河口が浅くならず大船の出入りが可能な三角江を「相変わらず商業繁昌の河口」であると述べている⁽⁵¹⁾。『人生地理学』では、「第十一章 河川」「第五節 河の部分と人生」において、「漏斗形の河口は多く大洋岸の潮汐の差引きの甚劇なる波浪の高き所に発達するものにして、ライン川、テムス川、アマゾン川等は即ち其の例なり。蓋し海潮の干満甚しきときは河水の伝送し来る土砂を浚へ去るのみならず、河口の土壤を削り取り、以て河底を深くし河幅を広め、以て大船の通航に便にす⁽⁵²⁾との指摘がある。

このように、河合が『歴史地理学』を読んで直ちに『人生地理学』を思い浮かべることができたのも、『人生地理学』を深く読み込んでいたからであろう。上の二つの視点は、いずれも自然環境が経済・産業に及ぼす影響の大きさを指摘したものであるが、重要なのは、大学で政治学を専攻する河合が、なぜ、この部分を「読書ノート」に書き記すほどの感銘を受けたのかということにある。その答えを導き出すのには、当時、河合の関心がどこにあり、他にどのような本を読んでいたのかを明確にする必要がある。

一高3年次と同様、東京帝大に進学してからも、河合の関心事は依然として歴史学にあった。1911年6月から10月までの「読書ノート」は、内村鑑三『コロンブスと彼功績』、同『興国史談』、L・デイル *Landmarks in British History*、E・ライヒ著・宮井安吉訳『国民功業論』、B・アダムス *The law of civilization and decay : an essay on history*、高桑駒吉『西洋史参考書略解題』、バックル *History of Civilization in England*、R・A・セリグマン著・河上肇訳『歴史の経済的説明 新史観』などの多数の歴史書の読後感で埋められている。特に、坪井の『歴史地理学』の読後感の前には、セリグマン『歴史の経済的説明 新史観』の要約および読後感が多数の紙面を割かれて記されており、河合が、アメリカの経済学者によって書かれたマルクス唯物史観の解説書に大きな反応を示したのがわかる。「Carl Marxといふ人に就き余り知らざりしが、其のinfluenceのextentの大なるに喫驚したり。(中略)今日迄歴史に就て色々と考へたりし見解が、非情なる発展を見たるが如き心地す⁽⁵³⁾と記しているように、河合は、同書によって、マルクスおよび唯物史観の存在をはっきりと認識し、歴史理論に関する見解を大きく発展させた。後年、「歴史への関心」という文章のなかで、同書にめぐり会ったときの感想を以下のように回想している。

⁽⁵⁰⁾ 『牧口常三郎全集』第2巻、164頁。

⁽⁵¹⁾ 前掲坪井書136-137頁。

⁽⁵²⁾ 『牧口常三郎全集』第1巻、189頁。

⁽⁵³⁾ 河合栄治郎「若き日の読書ノート(二)」『社会思想研究』20巻6号、1968年6月、48頁。

此の本が私に与えた感銘こそ正に素晴らしいものであった。私はそれまで何々の史観と云うものを持ってはなかったが、結局は無意識の裡に、観念史観の上に立っていたのであろう、それに対して唯物史観は正反対の史観を私に突きつけて、頭上に鉄槌を加えたのである。私は感銘を受けた当時でも、生産力、生産関係が歴史を動かす唯一の原動力とは思えなかった、然し今まで暗々裡に受容していた立場に対して、反省を促したと云う点で、私を心の底から震撼したのであった。それと同時に歴史を動かす原動力が何であるかを検討するのが、歴史哲学と称する学問であることを教えられ、唯物史観とは歴史哲学の一つであって、歴史哲学は多くの他の人びとにより与えられているのだと分かった⁽⁵⁴⁾。

「私は感銘を受けた当時でも、生産力、生産関係が歴史を動かす唯一の原動力とは思えなかった」とあるように、唯物史観の存在に強烈な衝撃を受けるものの、それを絶対的な原理として信じていくことができなかった。それは、同書を読んだ直後に、坪井の『歴史地理学』を読んで『人生地理学』の再読を思いついたことからわかるように、経済以上に自然環境が人間生活に大きな影響を及ぼすこと、また、経済も自然環境から大きな影響を受けるといったことを強く認識していたからであろう。中学時代から愛読してきた『人生地理学』は、河合が唯物史観、延いてはマルクス主義思想に踏み込むのを阻止した点で一定の効果を果たしたといえるだろう。後年、河合が反マルクス主義者として活躍したこと、河合と同年代の大内兵衛が『歴史の経済的説明 新史観』を読んで感激のあまり経済学専攻を決意し⁽⁵⁵⁾、我が国のマルクス経済学を牽引したことを考えると、そのことの意味は決して小さくはない。

4. 思想善導との関係

新渡戸稲造は、『創価教育学体系』第1巻の刊行にさいして、経済問題とともに、「日本国民として抱くべからざる危険思想を抱懐し、国家を根底より破壊せんとするが如き思想行動が、一部に流布喧伝されて、次第に一般民心に浸透せんとしつゝある」と思想問題の深刻さを指摘し、それらの問題の打開として「其の論述する所人生の目的より教育の目的を演繹し、国家社会生活に於ける人類の幸福を主眼とせる点に於て、従来の観念的な天上の幻影にも似たる教育目的を、科学的な地上の教育にまで現実化した」創価教育学に期待を寄せた⁽⁵⁶⁾。新渡戸は牧口の創価教育学に対してマルクス主義対策としての側面も期待したが、昭和初期における青年・学生による左翼運動の昂揚のなかで、牧口が思想善導的な役割を多少とも担ったことは事実である。

1930年11月の『創価教育学体系』第1巻の刊行によって、牧口は弟子の戸田城聖とともに創価教育学会を発足させ、自らの教育理論の構築とその実践に力を注ぐようになったが、文部省の学生思想問題調査委員会をはじめとする官製の思想善導に対して、「思想を暴力で取締るより外には、如何なる善導をもなして居ない」⁽⁵⁷⁾、「指導の目標たる善悪其の物の明確なる認識のない」⁽⁵⁸⁾と批判する一方、マルクス主義に染まった青年たちを自身の信仰である日蓮仏教に導くこともあった。

⁽⁵⁴⁾ 『河合榮治郎全集』第18巻、1968年、194—195頁。

⁽⁵⁵⁾ 大内兵衛『経済学五十年』上、東京大学出版会、1959年、7—8頁。

⁽⁵⁶⁾ 前掲新渡戸「我が国将来の教育と創価教育学」112—114頁。

⁽⁵⁷⁾ 『創価教育学体系』第3巻、『牧口常三郎全集』第6巻、17頁。

⁽⁵⁸⁾ 同上、19頁。

1933年2月から4月にかけて、長野県で138名の教員が共産党員・シンパとして検挙された（長野県教員赤化事件）が、そのうちの6名が後に創価教育学会に入会している⁽⁵⁹⁾。その一人で、後年、創価教育学会の理事となる矢島周平（秀覚）は、1935年1月に牧口宅を訪問し、牧口から「君はマルクス主義によって世の中が救えると考えているそうだね。わしは法華経の修行者です。法華経によって世を救おうと思っています。法華経が勝つか、マルクス主義が勝つか、大いに議論をしよう。もしマルクス主義が勝ったら、わしは君の弟子となろう。もし法華経が勝ったら、君はわしの弟子となって、世のためにつくしましょう」と提案された。そして、約3ヶ月にわたって議論を展開、矢島は牧口の理論に全く歯が立たず、約束通り、日蓮正宗に入信して牧口の指導を受けることになったが、その直後、牧口に警視庁労働課長と内務省警保局長の許に連れて行かれ、「今後、法華経の信仰に励み、国家有為の青年となるから御安心下さい」と完全転向の太鼓判を押されたという⁽⁶⁰⁾。

以上のような牧口思想善導との関わりは、左翼思想の防波堤として宗教団体を利用しようとする政府の方針に適うものであっただろうが、結果的に自己の思想・信仰運動を拡大したことを考えるならば、それは、政府の政策に利用されたというより逆に利用したといえないこともない。

1931年6月に文部省に設置された学生思想問題調査委員会の委員を囑託され、積極的に地方の教育会や高校などに出向き、マルクス主義批判とその対策について語った河合は、一時期、「思想善導教授」とのレッテルを貼られ、国家権力に迎合したとして進歩的な学生・知識人たちから激しく非難された。しかし、河合の立場からすれば、「私を誘うならば、これ文部省の私への妥協である。私にして毫も自己を譲歩しないならば、思想善導への参加が奈辺にとがむべきことがあるか。結局それは反動を援助するというならば、マルクス主義に対する反動にはなろうが、私のイデオロギーへの反動にはならない、私は私の思想の宣揚のためにはあらゆる機会を利用するであろう⁽⁶¹⁾」と、自己の理想主義思想を宣揚するために政府を利用しようとさえするものであった。

小学校教育に携わってきた牧口とは異なり、高等教育機関を職場としていた河合は、学生の左傾化による弊害を強く意識した。『帝国大学新聞』の理事や経友会（経済学部の教授と学生との联合会）の集会部長を長年務めた河合は、他の教員と比べて、学生と直接に接触する機会が多かったが、様々な場面で、左傾学生の教員に対する野次などの非礼な態度や、学業よりも運動を優先する光景などを目のあたりにした。大学を人格教育の場と捉えていた河合の眼には、大学におけるマルクス主義の隆盛は「教育ということを不可能にするところの教育上の大きな障害である⁽⁶²⁾」と映ったのである。将来有望な教え子たちが、マルクス主義の影響により階級闘争に夢中になり、自己の意識変革に眼を閉ざしてしまう傾向に強い危機感を抱いたのである。河合の考える「思想善導」とは、「学生のマルクス主義化の対策の根本的方針は、マルキシズムを抑圧することでも無ければ、又積極的に反マルキシズムの思想を宣伝することでも無い。肝要の点は、『如何に思想す

⁽⁵⁹⁾ 西野辰吉『戸田城聖伝』第三文明社、1997年、126頁。

⁽⁶⁰⁾ 矢島秀覚「法華経かマルクス主義か」、前掲『牧口常三郎』475-476頁。

⁽⁶¹⁾ 「大学の運命と使命—再び森戸辰男氏に答う」『河合榮治郎全集』第15巻、1968年、107頁。

⁽⁶²⁾ 「第五回公判記録」『河合榮治郎全集』第21巻、114頁。

べきか』の思维的能力の養成、批判的判断力の涵養に在るべきである」⁽⁶³⁾ というものであり、他の学生思想問題調査委員のように、マルクス主義の抑圧と国体論の普及を強調したものとは異なっていた。河合が政府に対してもマルクス主義者に対しても強く要求したのは、抑圧や宣伝を排除した「フェア・プレー」の下で正々堂々と議論を行い、よりよい社会を実現するに相応しい思想を構築しようとするものであった。

大学においてはそれがブルジョア科学たるとプロレタリア科学たるを問わず、平等に研究と教授とがなされねばならない。いづれより来るを問わず圧迫干渉は斯乎として排除すべきである。かかるフェア・プレーの下において帰趨を理論の闘争に委ねよう、もしそこでマルクス主義が理論的に克服されるならばそれがマルクス主義の運命である、もしマルクス主義が他を克服するならば、吾人は化してマルキストとなるだけである⁽⁶⁴⁾。

上の文章を読むとき、前述した牧口が矢島周平に語った言葉との親近性を思わずにはいられない。

5. 戦時下の抵抗

河合が「思想善導教授」という汚名を脱して「戦闘的自由主義者」としての名声を獲得していたのは、滝川事件や天皇機関説事件などの思想・言論弾圧、五・一五事件や二・二六事件などの軍事クーデターに対して、その自由主義思想に基づき真っ向から批判を展開していったからである。特に、『帝国大学新聞』1936年3月9日付に発表した「二・二六事件の批判」は、近代日本における自由主義の金字塔ともいべき論文であった。ここで河合は、「ファッシストの何よりも非なるは、一部少数のものが暴力を行使して、国民多数の意志を蹂躪するに在る」⁽⁶⁵⁾ と、皇道派青年将校たちの行動を直接批判するとともに、「国軍の首脳部にその人なく、左顧右眄一時を糊塗して荏苒時を逸したる結果は、遂に此の破綻を惹起するに至った」⁽⁶⁶⁾ と、クーデターを未然に防ぐことのできなかった陸軍当局の責任をも強く追及する。また、軍が国土防衛という職能から武装が許されていることを強調し、「吾々が晏如として眠れる間に、武器を持つことそのことの故のみで、吾々多数の意志は無の如くに踏み付けられるならば、先ずあらゆる民衆に武器を配布して、公平なる暴力を出発点として、吾々の勝敗を決せしめるに如くはない」⁽⁶⁷⁾ と、職能を越えて政治介入する軍部への批判に止まらず、公正な政治運営を実現するための市民の自己武装権にまで言及する。戒厳令により報道規制が布かれる状況のなか、軍部を容赦なく批判する言論の発表は大胆かつ勇敢なものであった。今日「急進的自由主義者」として評価される石橋湛山でさえ、事件

⁽⁶³⁾ 『学生思想問題』『河合榮治郎全集』第19巻、1969年、24頁。

⁽⁶⁴⁾ 前掲「大学の運命と使命—再び森戸辰男氏に答ふ」109頁。

⁽⁶⁵⁾ 『河合榮治郎全集』第12巻、1968年、46頁。

⁽⁶⁶⁾ 同上、49頁。

⁽⁶⁷⁾ 同上、47頁。

の経済的影響を指摘したり、言論機関の対応を批判するだけで、軍部への直接攻撃を避けた⁽⁶⁸⁾ことを考えると、河合の言論の突出性がわかるであろう。

まさに軍部への挑戦状ともいえる「二・二六事件の批判」は、その簡潔な内容とタイミングのよさなどから、軍部の横暴に憤りを感じていた多くの読者の溜飲を下げる働きをなした。論敵の美濃部亮吉でさえ「ファシズムに対し、軍部に対し、いいたくていい得ないであることを、国民に代って、勇敢に主張されたのである。その筆鋒は鋭く、その文章は美しく、その態度は勇敢であった」⁽⁶⁹⁾と評価せざるをえないものであった。

そして、日中全面戦争の勃発は国内の戦時体制強化を促し、政府は「挙国一致」「尽忠報国」「堅忍持久」のスローガンの下、個人の内面的な自由を前提とした上で成立する思想・学問・教育・宗教などの分野への統制を強めていく。河合の職場である東京帝大経済学部は、現実社会に密接に関わる経済学を扱う場であるだけに、そうした時局に敏感に反応していった。統制経済学を専門とする土方成美教授を中心に、本位田祥男、田辺忠男、中西寅雄、荒木光太郎の諸教授が結束、学外の右翼や青年将校と呼応して、時局や国策に即応できる大学への「革新」をはかろうとした⁽⁷⁰⁾。彼らは、具体的には、敵対する矢内原忠雄と大内兵衛の両教授を追放し、学内人事に関して大学自治を否定する荒木貞夫文部大臣による大学改革を推進していった。

河合は、こうした「革新派」教授たちの策謀に、自由主義の「純理」に基づいて真っ正面から抵抗していった。しかし、それが仇となり、軍部や革新右翼は、排撃のターゲットを河合に絞り込んでいったのである。1938年10月、内務省図書課は、『社会政策原理』『ファシズム批判』『時局と自由主義』『第二学生生活』の四著を発禁処分とし、翌39年1月、大学自治を主張して自発的辞職に応じない河合に対して、平賀讓東京帝大総長は具状権を行使して休職処分に付した。さらには、翌2月、東京刑事地方裁判所検事局が発禁四著を出版法第27条の「安寧秩序ヲ紊ルモノ」に該当するとして起訴した。しかし、河合は法廷においても、自己の思想の正当性を主張する絶好の機会として捉え、思うところを存分に発言し、「戦闘的自由主義者」としての態度を貫いた。「滅私奉公」の全体主義に対しては、「往々にして全体主義というものが、唯全体主義の集団だけを考へて、構成する個々の人間というものを無視し軽視しているということに対して我々は反対で、その個人というものに注目して、その個人を団体の為めに尽させるように習練し得るようになることが人格主義の目的なのであります」⁽⁷¹⁾と、軍部の政治進出に対しては、「本来は軍人にそれだけの適當の能力を欠いている」、「能力を欠いているものが手を入れるのは妥当でないし、また軍人自身の専門の領域が非常におろそかになってくる、詰まり政治家的の氣質が軍人に起こってくるということは、軍人というものにとって好ましくない」⁽⁷²⁾と言い切ったのである。

⁽⁶⁸⁾ 芳賀綏「自主独往、信念強固だが、現実対処には弾力思考—天衣無縫に思考し行動した、理想主義とオプティミズム」(シリーズ「石橋湛山を語る」第17回①)『自由思想』第119号、2010年8月、8—9頁。

⁽⁶⁹⁾ 美濃部亮吉『苦悶するデモクラシー』文藝春秋、1970年、207頁。

⁽⁷⁰⁾ この時期の経済学部内の動向については、竹内洋『大学という病』(中公叢書、2001年)、立花隆『天皇と東大』下(文藝春秋、2005年)参照。

⁽⁷¹⁾ 「第一回公判記録」『河合榮治郎全集』第21巻、50頁。

⁽⁷²⁾ 「第四回公判記録」『河合榮治郎全集』第21巻、88頁。

また、裁判闘争に力を注ぐ一方で、未曾有の難局に直面している学生や国民一般に対してあるべき態度を説いた『学生に与う』や『国民に懇う』などの著書を執筆するとともに、自己の理想主義思想体系の完成を目指し、凄まじいまでの読書と思索を行った。結果的に、そうした過労がたたりに、1944年2月15日、53歳の若さで他界したのである。不遇のなかでの早過ぎる死は、自殺と推測する者もいるほどであった。学徒兵として著名な上原良司は、1944年2月22日付の手記に、「河合栄治郎氏、心臓麻痺にて歿すを聞く。思想界の巨星墮つ感深し。時あたかも、彼の如き思想家の生き難き時代なり。自殺せるのではないかと思わる。真に心臓麻痺とせば彼は幸福なり」と記している⁽⁷³⁾。

河合が東京帝大を追い出され、出版法違反に問われた1939年は、4月に宗教団体会法が制定されるなど政府の宗教統制が強められた年でもあった。そうしたなかにあつて、牧口は自らの運動を教育改造から宗教革命へとシフトさせていく。創価教育学会は、事実上の第一回総会が開催された1939年12月頃から、教員だけでなく実業家などの一般人も参集し、教育よりも宗教活動を全面に打ち出していったのである⁽⁷⁴⁾。

1928年に日蓮正宗の信者であった三谷素啓を介して日蓮仏教と出会った牧口は、「吾々の日常生活の基礎をなす科学、哲学の原理にして何等の矛盾がないこと、今まで教はつた宗教道徳とは全く異なるに驚き、心が動き初めた矢先き、生活上に不思議なる現象が数種現はれ、それが悉く法華経の文証に合致してゐるのに驚歎の外なかつた」⁽⁷⁵⁾ という体験を経て、以降、日蓮正宗の在家信徒として信仰活動に踏み切ることとなった。

牧口は日蓮仏教を信仰するなかで、「創価教育学の思想体系の根底が、法華経の肝心にある」、「日本のみならず世界に向つてその法によらざれば真の教育改良は不可能である」⁽⁷⁶⁾ と確信するようになっていった。激しい生存競争のなかで「円満なる社会生活」を構築することを目指し、それを教育改良によって実現しようとしてきた牧口であったが、科学的哲学的に矛盾のない日蓮仏教への確信を深めるなかで、この信仰こそがあらゆる人のなかに「信」を確立させ、真の共生社会を実現できると考えるようになったのである。

自他共に各が、自身に対し、はた他人に対し、一定不変の信を確立することができ、これでこそ自他共に安心して仕事を共にし、少くとも予定目的の達成まで結合して離れる心配が起らぬといふ方法が講ぜられるならば、それこそ暗闘明闘の生存競争に生活力の大部分を徒消するに困憊しつつある現世に於て万人の渴望する所でないか。いふ勿れ、たとへ容易ならぬ希望とはいへ、この世に於て全く実現のできない空想に過ぎないと⁽⁷⁷⁾。

日中全面戦争に突入して戦時体制が強化されると、個人主義思想は一概に排撃され、「滅私奉公」

⁽⁷³⁾ 上原良司『新版 あゝ祖国よ恋人よ』信濃毎日新聞社、2005年、116頁。

⁽⁷⁴⁾ 前掲『牧口常三郎』125頁。

⁽⁷⁵⁾ 「創価教育学体系梗概」『牧口常三郎全集』第8巻、1984年、405頁。

⁽⁷⁶⁾ 同上、410頁。

⁽⁷⁷⁾ 同上、414-415頁。

の全体主義を強いられるようになったが、これに対して、牧口は、「自己を空にせよといふことは嘘である。自分もみんなも共に幸福にならうといふのが本当である」⁽⁷⁸⁾、「所謂『滅私奉公』は一生に一度しか行ひ得ない理想である。この非常道徳を銃後の生活に強行しようとするは無理である」⁽⁷⁹⁾と強く反撥した⁽⁸⁰⁾。牧口は、「生活の三階級」として、「一、近視眼的偏見の世界観に基づく個人主義的な小善小悪の生活」、「二、遠視眼的偏見の世界観に基づく反個人主義的（空全体主義的）なる中善大悪の生活」、「三、正視眼的全見の世界観に基づく真全体主義的な大善無悪の生活」の3つの生活を指摘する⁽⁸¹⁾。第一の「小善生活」は、自己のこのみを考える個人主義的な「現在の平常の生活」で、「大した損害もないが、大した利益もない」⁽⁸²⁾という。第二の「中善生活」は、当代における指導階級の「外には大善を装うて内実は私慾をはかる個人主義を抜け切れない」生活で、それこそが「新体制が『画龍点睛を欠く』といはれて、仲々理想通りに容易に結実し得ない所以である」⁽⁸³⁾という。第三の「大善生活」は、「自他共に共栄することによって初めて、完全円満なる幸福に達し得る真実なる全体主義の生活のこと」⁽⁸⁴⁾で、歴史的には、和氣清麻呂、菅原道真、楠木正成、徳川光圀など「大忠臣」と呼ばれるごくわずかな歴史上の偉人が行ってきたものであるが、「大忠臣」のように法華経を信仰することで誰にでも可能であると主張する。そして、「大忠臣を真似よと言ひながら、法華経信仰させてならぬ」という政府の方針に対して、「梯子なくして二階へ上れといふやうなものである」⁽⁸⁵⁾と強く反対する。

先に『人生地理学』において、名聞名利を排して積極的に社会貢献する理想的な人間像を「全社会的の優勝級」と位置づけた牧口は、日蓮仏教と出会うことで、その理想的な人間像を法華経信仰によって確立できると確信したのである。しかし、戦時下の宗教統制のなかで、日蓮仏教は、その根本的宗義である仏本神迹説や法主国従説が不敬であるとして、その信仰に対して大きな統制が加えられていった⁽⁸⁶⁾。牧口の晩年は、そうした統制への抵抗と、できるだけ多くの者を法華経に導くという熱心な布教活動に向けられていったのである。

内務省神社局から改組昇格した神祇院は、1941年8月、「神宮大麻の奉斎について」という意見書を発表し、各家庭に伊勢の皇大神宮の大麻（神札）を奉祀させるよう勧告した⁽⁸⁷⁾が、これに対して、牧口は「いかに古来の伝統でも、出所の曖昧なる、実証の伴はざる観念論に従つて、貴重なる自他全体の生活を犠牲にすることは、絶対に誠しめられなければならぬ。これに就ては一

⁽⁷⁸⁾ 「目的観の確立」『牧口常三郎全集』第10巻、1987年、8頁。

⁽⁷⁹⁾ 「価値判定の標準」『牧口常三郎全集』第10巻、35頁。

⁽⁸⁰⁾ 松岡幹夫は、「牧口が『滅私奉公』を徹底的に批判したことは、戦争遂行に不可欠な国民道徳上の前提を転覆させようとしたわけであり、一種の道徳的な反戦運動だったと考えられなくもない」と述べている。松岡幹夫『日蓮仏教の社会思想的展開』東京大学出版会、2005年、250頁。

⁽⁸¹⁾ 「新体制の理想たる大善生活法の意義と可能」『牧口常三郎全集』第10巻、135頁。

⁽⁸²⁾ 同上、135頁。

⁽⁸³⁾ 同上、136頁。

⁽⁸⁴⁾ 「大善生活法即ち人間の平凡生活に」『牧口常三郎全集』第10巻、14頁。

⁽⁸⁵⁾ 「法華経の信者と行者と学者及び其研究法」『牧口常三郎全集』第10巻、157頁。

⁽⁸⁶⁾ 戦時中の日蓮仏教への統制については、宮田幸一『牧口常三郎の宗教運動』（第三文明社、1993年）参照。

⁽⁸⁷⁾ 同上、215頁。

番先づ神社問題が再検討されねばならない⁽⁸⁸⁾と批判し、会員には「謗法払い」として神札を焼却させ、神社への参拝も禁じた。また、「大善生活法実証座談会」と銘打った、一対一の対話を主とする座談会運動に力を入れ、1941年5月から43年6月までの2年間で240回以上の座談会を開催した。こうした座談会運動や熱心な折伏によって、創価教育学会は、1942年11月の段階で、東京に16支部、地方に12支部、会員4000名の陣容を擁していたのである⁽⁸⁹⁾。

こうした牧口の厳格な信仰とは対照的に、日蓮正宗総本山大石寺は国家権力に圧され、1943年6月、創価教育学会に対して神札受諾勧告を下した。牧口は、「一宗が減びることではない、一国が減びることを、嘆くのである。宗祖聖人のお悲しみを、恐れるのである。いまこそ、国家諷曉の時ではないか。なにを恐れているのか知らん」という決意に立ち、この勧告を断乎拒否した⁽⁹⁰⁾。それからまもない7月6日、牧口は滞在先の下田にて逮捕された。容疑は治安維持法違反と不敬罪であった。

逮捕後も抵抗姿勢を決して崩さなかったことは、警視庁での訊問調書を読めば歴然である⁽⁹¹⁾。「天皇陛下も凡夫」、「天皇陛下も間違ひも無いではない」と「現人神」としての天皇の立場を否定するとともに、「教育勅語の中に、親に対しては『父母ニ孝ニ』と明示してありますが、陛下御自ら臣民に対して忠義を尽せと仰せられる事は、却而陛下の御徳を傷付けるもの」と、教育勅語に関する問題点も指摘した⁽⁹²⁾。そして、当時、「聖戦」とされた戦争に対しても、「現在の日支事変や大東亜戦争等にしても其の原因は矢張り謗法国である処から起きて居ると思ひます」⁽⁹³⁾と言い放ったのである。しかし、獄中での過酷な生活に老齢の身は付いていくことができず、1944年11月18日、東京拘置所にて73年の生涯を閉じたのである。

おわりに

牧口も河合も不遇のうちに志半ばで生涯を閉じたが、その大きな志は弟子たちによって継承されていった。戸田城聖は、師の牧口とともに逮捕されたが、終戦直前に釈放され、戦後、創価学会を再建、我が国最大級の宗教団体にまで発展させた。河合門下の山田文雄、木村健康、土屋清、関嘉彦、猪木正道らは、1946年11月、社会思想研究会を結成し、戦後の荒廃した日本社会において、理想主義と民主社会主義の普及に力を注いだ。

このように、師弟の間で大事業の継承を可能にさせたのは、弟子の師への厚い親愛の情もさることながら、師の教育者としての資質によるところが大きかったと考えられる。牧口にしても河合にしても、その真骨頂は教育者にあった。教育者として多くの弟子から慕われる一方、自らも教育者として相応しい行動を貫くことができたのである。

⁽⁸⁸⁾ 「宗教改革造作なし」『牧口常三郎全集』第10巻、26頁。

⁽⁸⁹⁾ 前掲宮田書、146頁。

⁽⁹⁰⁾ 戸田城聖「創価学会の歴史と確信」『戸田城聖全集』第3巻、聖教新聞社、1983年、106-107頁。

⁽⁹¹⁾ 「訊問調書」での牧口の発言を詳細に分析したものに、伊藤貴雄「牧口常三郎の戦時下抵抗（第一回）—天皇凡夫論と教育勅語批判を中心に—」(『創価教育』第2号、2009年3月)。

⁽⁹²⁾ 「創価教育学会々長牧口常三郎に対する訊問調書抜粋」『牧口常三郎全集』第10巻、203頁。

⁽⁹³⁾ 同上、201-202頁。

牧口は、「悪人の敵になり得る勇者でなければ善人の友とはなり得ぬ。利害の打算に目が暗んで、善悪の識別の出来ないものに教育者の資格はない。その識別が出来て居ながら、其の実現力のないものは教育者の価値はない。教育者は飽まで善悪の判断者であり其の実行勇者でなければならぬ」⁽⁹⁴⁾と、河合は、「人間は只一筋の路を真直ぐに進むだけです、これが師として私の説いた道でありました、教師は学生を欺いてはならない、学生の師に対する不信ほど教育のためにおそろしいことはないと思ひます」⁽⁹⁵⁾と、それぞれ理想とする教師像を述べている。両者の戦時下における勇敢な行動は、まさに、それぞれが理想とする教師像を自らの身をもって体現しようとするものであった。そのような師の命懸けの闘争に弟子たちは感動し、自らもそれを模範として生きることを決意したのである。

現実的に師表となる人物の存在を見出せにくい今日、この二人の歴史上の精神的巨人から学ぶことの意義は決して小さくはない。

⁽⁹⁴⁾ 『創価教育学体系』第3巻、『牧口常三郎全集』第6巻、71頁。

⁽⁹⁵⁾ 『東京日日新聞』1938年1月29日付。